

# Wakayama University Tourism Update

Semiannual Newsletter of Tourism Education & Practice

WTU Autumn/Winter 2017



2017年11月18日(土) 和歌山大学祭にて  
LIP 広川町(写真左)とLIP 紀美野町上神野(写真右)で活動しているメンバーが  
それぞれの地域の特産品を使った模擬店を出店しました!(完売御礼!!!)

## Contents ー目次ー

1. Reports ー和歌山大学観光学部生の国際/地域活動報告を紹介ー
2. Topics ー過去のイベントとニュースー
3. Future Events ー今後のイベント紹介ー

■ 小原 里穂さん (学部 4 回生 / 岩手県立水沢高等学校出身)

参加イベント：ASEAN Plus Three Tourism Youth Summit

in Thailand, in the Philippines and in Japan



今回、3 カ国で行われた、ASEAN Plus Three Tourism Youth Summit に日本からのユースの代表の 1 人として参加させて頂きました。第一部のサミットは、2017 年 9 月 19 日から同年 9 月 29 日の約 10 日間、タイの首都バンコクとフィリピンの首都マニラを中心に行われ、合計約 50 名の観光分野で活躍するユースの代表が各国から集まりました。第二部は、10 月 18 日三重県鳥羽市で行われた、「持続可能な観光国

際年」を記念するシンポジウムです。ASEAN Plus Three のユースの一員として出席しました。そこでは、「観光業の持続可能な発展における女性の役割」をテーマに議論、プレゼンテーションを行いました。

第一部の、タイとフィリピンで行われたサミットでは、“Competitive and Sustainable Tourism Development” をテーマに、多様な観光戦略や持続性を学びました。主なトピックとしては、MICE 産業、観光マーケティング、ソーシャルメディアを用いた観光促進、そして文化や遺産保護に関するマネジメントなど、多角的で先進的なものでした。約 10 日間、活発な議論や活動を通して、私たちアジアの国としての「共通点」を見つけると同時に、各国の「違い」を共有し合う、素晴らしい機会になりました。

第二部の鳥羽のシンポジウムでは、「女性の役割」をテーマに議論が行われました。10 月 15 日に和歌山大学で行われたユースの中での意見交流で、各国における「女性の役割」の共通点や違いを共有し、今後の可能性や課題を議論しました。当日のシンポジウムでは、立場や国を超えた様々な議論が行われ、私たち若い世代が受け継ぐべきこと、そして未来へ向けてさらに発展させるべきことを再認識しました。

今回のサミットを通して、国や立場を超え、意見や考えを共有し、同時に「人の輪」も広げることができています。特にユースの中では、異なる考えや経験の共有を通じて、未来へ繋がる、より良い関係を構築することができました。観光の分野で活躍する素晴らしい仲間たちと出会い、別れ際は寂しくなりましたが、各々の場所で私たちの課題に一生懸命取り組んでいこうと決意しました。今後、「若者の夢」で終わらせることなく、政治や経済、国の枠を超えて、実行に移していくのが私たちの使命だと思っています。

そして最後に、このような貴重な機会を与えてくださり、支えて下さった皆様に、本当に感謝しております。この経験を糧に、さらに自分自身を向上させ、人の輪を広げていきたいと思っています。



■ 寺澤 舞花さん (学部1回生/雲雀丘学園高等学校出身)

参加イベント：PATA(Pacific Asia Travel Association) 和歌山学生支部の研修旅行  
(和歌山県田辺市、白浜町)



PATA 和歌山大学学生支部は、持続可能な観光(サステナブル・ツーリズム)を学ぶため、2017年7月22日に和歌山県田辺市にて研修旅行を行いました。国連観光連盟(UNWTO)が定めた「世界観光の日」の今年のテーマ、「持続可能な観光—開発のためのツールのひとつとして」に合わせ、実際にサステナブル・ツーリズムの体験、またどのようにして地域が持続可能な観光地となり得るのかを考えることを目的としました。今回の研修旅行には18名のメンバーが参加し、午前中は2グループに分かれて活動しました。まず熊野古道では4時間かけ自ら歩いてみることで、化石燃料に頼らずその地域に潜在する資源を使って観光を楽しむ素晴らしさ、またその観光手段の課題や地域全体の改善点を見出すことができました。シーカヤック体験では和歌山県の自然の広大さを体感することができ、ただ楽しむだけでなく観光と環境の関係性を考えさせられました。また秋津野ガルテンでは、地域社会が生き残る手段として実際に持続可能な取り組みを試み、成功した例をお聞きしました。

成功するまでにぶつかった課題など、非常に興味深い内容でした。

また、この研修旅行で学んだことを「World Tourism Day」にあわせて観光学部棟にパネル展示を行いました。PATAの団体や私たちの活動について多くの方に知ってもらえる機会にもなったと思います。

今回の研修旅行は、これから私たちがサステナブル・ツーリズムを深く学んでいく上で貴重な体験となりました。今後この経験を活かして、より良い観光の在り方を考えていきたいと思います。



World Tourism Day 世界観光の日 記念イベント 2017  
パネル展示  
**サステナブル・ツーリズムの学び**  
～PATA 和歌山大学学生支部の研修旅行より～



2017年 **9月27日(水) 13:00**～**10月27日(金) 15:00**  
会場 **和歌山大学 観光学部棟 (西4号館) 2階多目的スペース**

共催 PATA 和歌山大学学生支部、和歌山大学 観光学部  
後援 和歌山大学国際観光研究センター



※関連記事が12ページにあります。



■ 藤居 悠河さん (学部2回生/大阪府立泉北高等学校出身)

中山 志織さん (学部1回生/私立初芝富田林高等学校出身)

初鳥 幸菜さん (学部1回生/石川県立金沢商業高等学校出身)

参加イベント：PATA(Pacific Asia Travel Association) 和歌山大学学生支部の東京訪問



私たち PATA 和歌山大学学生支部は、観光に関わる方たちと交流することを目的に9月23日から26日までの4日間東京訪問を行なって来ました。23日は、日本最大級の旅の祭典である「ツーリズム EXPO ジャパン 2017」に参加しました。これは、9月21日から9月24日までの4日間、東京ビッグサイトで開催されているもので、今年は過去最大の来場者数を記録したとのことでした。前半2日間は業界・プレス日となっており、ビジネスマッチングに広く利用されています。一般公開は後半2日間で行われ、私たちも視察と観光の現状を知るために参加してきました。会場は国内、海外の2つのブースに分かれており、旅行会社や自治体、観光局など観光に関わる企業、団体がVRやパンフレットなど様々な方法で各地を紹介していました。様々な分野・業界で活躍している方々とお話もでき、さらに観光に興味を持ちました。

24日には東海大学で日本観光学生連盟(学観連)の方6名とPATA 和歌山大学学生支部として初めての学生交流を行いました。学観連とは観光を学ぶ学生同士でネットワークを作り、学習活動やボランティアを通して実社会における観光の新たな可能性を見つける為、設立された学生組織です。7月22日に実施した当支部の研修旅行で学んだことを活かし、学観連の学生とともに、サステナブルツーリズムについて

ディスカッションをしました。彼らの意見は、私たちとは異なる視点をついたものもあり、刺激を受けました。その後、議論を通して得た内容を踏まえて、3つのグループで旅行プランの作成をしました。どのプランもアイデア溢れるものばかりで、楽しみかつ観光についてさらに考えを深めることができました。

➡ PATA 和歌山大学学生支部については、下記の Facebook ページもご覧ください。

<https://www.facebook.com/pata.wusc/>

## ■ 大林 みのりさん (学部3回生 / 大阪府立富田林高等学校出身)

### 参加プログラム：Global Intensive Project (GIP) ～ Alberta, Canada



私たちはカナダのアルバータ州の州都エドモントンに約1ヶ月間滞在しました。滞在中は英語を学習するだけでなく、アクティビティやホームステイを通じてカナダの文化や生活を体験してきました。平日はアルバータ大学の語学学校で、海外の生徒達と共に英語を学びました。授業は、自分の意見を英語で伝える練習の場であったと同時に異文化を理解する場でもあり、毎日良い刺激を受けながら学習に励むことが出来ました。休日にはアクティビティとしてバンフ国立公園やフォードエドモントンパークなどの観光地へ出掛けました。

その中でもバンフの壮大な山々とエメラルドグリーン湖は圧巻で、ため息がでるほど美しかったです。

貴重な経験を沢山させていただきましたが、プログラムの中で特に印象に残っているのはホームステイです。渡航前はまともに英語も話せない私が、1ヶ月間も他人の家で過ごせるかとても不安でしたが、ホストファミリーは私を本当の家族のように温かく迎え入れてくれました。彼らと一緒に他愛もない話をしながら笑っている時間が最高に幸せで、カナダに来て良かったと心から思える瞬間でした。ホームステイを通じて素晴らしいホストファミリーに出会えたこと、そしてカナダの文化や生活スタイルを存分に体感できたことを大変うれしく思います。

カナダで過ごした1ヶ月間は毎日が驚きと発見の連続であり、私にとって非常に学びが多かったです。ホストファミリーを初め、異なる文化や価値観を持つ人々との出会いは、自分自身を見つめ直すきっかけを与えてくれました。そして私と彼らを繋ぐ「英語」の大切さを再認識させてくれました。プログラムの中では失敗を恐れず、英語で出来る限り自分の意見や意思を伝えようと努めましたが、上手く表現出来ずもどかしさを感じることも多々ありました。英単語を並べれば何とか会話にはなりますが、それでは言葉のニュアンスは伝わっても、自分の気持ちや本当に伝えたいことを表現することが難しい場合があります。お互いを理解するためにより深くコミュニケーションをとるには、英語は必要不可欠だと実感しました。今回の経験を活かして英語力の向上に努めるとともに、今後も異なる言語や文化をもつ人々と交流をしていきたいです。



## ■ 角野 温香さん (学部1回生 / 大阪府立天王寺高等学校出身)

### 参加プログラム : Global Intensive Project (GIP) ~ Queensland, Australia



私たちは今回、オーストラリアのクイーンズランド州にあるブリスベンへ5週間の語学研修に行きました。1回生3名、2回生2名の計5名で参加しました。あくまで個人的な感想ですが、このオーストラリアのプログラムは、かなり自由な時間が多かった気がします。ホームステイという形で、平日の午前中はクイーンズランド大学附属英語学校 (ICTE-UQ) に通って英語の授業を受け、午後からは自分の好きなところに出かけたり、授業で与えられた課題などをし、土日はどちらも完全にフリーだったので、有名な観光地に遠出することができました。

ICTE-UQでは、まず初日にクラス分けのためのテストを受け、自分の英語力に見合ったクラスで約4時間の英語の授業を受けました。いろいろな国の人と関わることができたし、コーラスやお菓子作り、スポーツなど、様々なアクティビティに参加することで本当に充実した大学生活を送っていたと思います。そして、英語の勉強時間は大学の授業内だけではありません。ホームステイ先に帰って、ファミリーと夕食を食べながらたわいもない話をする……。現地で使われている本当の英語を吸収できる大切な時間です。ネイティブの英語を日常で体感し、自然と身につけることができることこそ、ホームステイの醍醐味であると思います。

「せっかく5週間もあるのに、勉強だけではもったいない!!」ということで、土日はモートンアイランドやゴールドコーストといったリゾート地に行って、しっかり観光もしてきました。特に、モートンアイランドで過ごした時間は印象深く、エメラルド色の海でシュノーケリングやカヤックをしたり、砂丘のような場所で砂滑りをしたりと、貴重な体験をいくつもすることができました。また、現地で有名な食べ物の情報をいろいろな人から教えてもらい、それを目当てにお店巡りもしました。やはり、外国に行くとグルメも楽しみの一つになると思います。

この5週間は何ものにも代えがたい、本当にキラキラとした時間でした。英語をペラペラに喋ることができるようになったわけではないですが、行く前と比べると、行った後では英語に対するモチベーションがかなり上がり、英語の発音が良くなったことを強く実感しています。自分の世界を広げる大きなきっかけになったプログラムでした。



■ 池田 和志さん（学部2回生／鳥取県立米子西高等学校出身）

参加プログラム：地域インターンシップ Local Internship Program (LIP)

「公益社団法人日本マスターズ陸上競技連合が主催する  
国際・第38回全日本マスターズ陸上競技選手権大会において  
スポーツを通じて、地域の人びとや海外競技者との国際交流」  
(和歌山県和歌山市)



国際・第38回全日本マスターズ陸上競技選手権大会が和歌山県紀三井寺陸上競技場で開催されるにあたり、学生はチラシ配りやポスターの製作を通してマスターズへの一般客の理解、興味促進をはかりました。また大会前日に行われた交流会、シンポジウム、開会式の運営スタッフ、大会当日は地域のボランティアの皆さんと一緒に選手の受付や、和歌山県内の企業、団体が出展していたブースの手伝いを行いました。学生が作ったポスターは大会当日と、シンポジウムの際、一般のお客様、選手の皆さんに披露しました。ポスターは好評で持ち帰りたいと申し出があるほどの出来になりました。

今回の活動の中で、ある学生はシンポジウムの司会を担当し、またある学生は韓国の団体とのコミュニケーションをとるなど、それぞれのスキルを試すことができました。

全体としては、学生は大会役員、スタッフ、選手、その他関係者といったいろんな立場、役割の方たちと関わりを持たせていただくことを通じて、規模の大きいイベントなどにおける人の関わり、協力の大切さや裏の運営の重要さに築くことができたのではないかと思います。

このLIPに参加した理由は、私が現在陸上競技部に所属しており、何度かマスターズの補助員をしたことがあることから、この大会を盛り上げる一員になりたいと考えたからでした。

活動はトラブルなどで困ることもありましたが、県外から来る方々に不自由なく大会期間を過ごしていただくための、ホストとしての役割の大切さなどを学ぶことができました。

高齢者の方の参加が多い中で何人かと話をしながら、若い人たちの活躍をしっかり見守っていてくれていて、学生たちが期待されていることなどを感じました。私たちも大会に出場された方たちに負けないくらい頑張っていこうと感じることができました。



■ 北橋 里花さん (学部2回生 / 和歌山県立海南高等学校出身)

参加プログラム：地域インターンシップ Local Internship Program (LIP)

「世代間交流を推進する地域拠点の企画・運営 (認知症カフェでの実践を通じて) ～ RUN 伴 WAKAYAMA2017 への参加」

(和歌山県海草郡紀美野町) ※2015年度～

RUN 伴 (ランとも) とは今まで認知症の人と接点がなかった地域住民と、認知症の人や家族、医療福祉関係者が一緒にタスキをつなぎ、日本全国を縦断するイベントである。このイベントを通じて、認知症の人へのマイナスなイメージ持っでしまいがちな地域の人々も喜びや達成感を共有することによって認知症の人も地域で伴に暮らす大切な隣人であることが実感できる。RUN 伴はそんなあらゆる人々の出会いの場をデザインし、顔の見えるつながりを各地で生み出す役割を果たしている。

今年、和歌山県では紀南エリアが9月30日(土)、紀北エリアでは10月7日(土)に開催された。私たちが参加した紀北エリアは、紀美野町、高野町、和歌山大学の3つのスタート地点からゴールの宮前小学校へとそれぞれタスキをつないだ。

今回で私にとっては2回目のRUN 伴で、今年も去年と同様応援だけでなくランナーとして参加した。紀美野町スタートのコースに参加したが、一緒に走るのがデイサービスの利用者さんだったこともあり、私たちに与えられた距離はそこまで長くなく、ペースも走るというよりは歩いてタスキをつなぐといったものだった。しかしその中で一番感じられたものはやはり、地域の人とのつながりである。イベントを通じて参加者たちが自然とコミュニケーションをとり、また喜びや達成感を共有することで地域が一つになっているように見えた。

私はRUN 伴がとても大好きなので、来年も参加しようと思う。また、RUN 伴を通じて地域の人々の認知症に対する理解や知識がより深まればよいなと考えている。





■ 田村 滯さん (学部4回生/帝塚山高等学校出身)

参加プログラム：地域インターンシップ Local Internship Program (LIP)

「農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と  
農村再生手法としての可能性の検証」

(岩手県奥州市・金ヶ崎町) ※2012年度～



観光学部の地域インターンシップの一つである農村ワーキングホリデー(以下、農村WH)は、学生が農家の方のお宅に泊まり込み、農作業をしながら交流を深めると同時に、日本、さらには世界の農業・農村に関する課題について考えることを目的としています。夏季休暇中に行われており、講義で学んだことを実際に自分の五感で感じることができる、いわば「理論と実践」の絶好の機会です。和歌山県の2つの地域と、岩手県奥州市で開催されていますが、特に奥州農村WHは今年で6年目を迎え、これまでに延べ200人もこのプログラムに参加してきました。

この農村WHでとても印象的なのは、参加学生・受入農家の方々それぞれが刺激を与え合うことで、原動力に繋がっていることです。学生は農作業や受入農家の方との交流により、現代ではなかなか見えてこない農業の実態、そして農家の方がいかに私達が口にする食材に責任を持っているのか等、日常生活では知ることのできないお話を農家の方から多く学ぶことができます。また約1週間という期間で、はじめはこれから始まる農村での生活に不安だった学生も、受入農家の方のお宅に行き、学生の様子を見に行くとまるで家族のように農家の方と話したり、積極的に作業を進めたりと、自己の成長のきっかけを与えて下さっていると思います。また受入農家の方にお話をお聞きすると、「若い学生さんと一緒にいて元気をもらっている」、「地区が異なるため普通なら出会うことのない農家同士の方で、野菜や果物を交換し合っている」等、世代や地域を越えた新たな繋がりができています。特に今年は、ある受入農家の方が先導し、自分の住む地域について住民同士で考えるセミナーを開催するという新しい試みもありました。

このことから、農村WHは自分自身の小さな変化から、地域全体までに波及する大きな変化まで見出すことができると思います。またそれは、観光の原点である「国の光を観る」=「地域の光を観る」ための役割も果たしているのではないかと思います。観光は現在、世界的に注目され、インバウンドやVRといった観光に関する用語を毎日耳にします。日本では、訪日観光客を年間4000万人にまで増加させるという目標を定めています。ですが、数字だけではなく見えない部分、つまり人と人との交流や地域文化の観点にも注目しつつ、観光を通じた社会問題への解決にも繋げる必要があると思います。

日本の農業においては、高齢化や食料自給率の低迷といった様々な課題がある中で、農村WHの効果は少しずつ、しかし確実に地域の中に広がってきているのではないかと感じます。私自身、奥州農村WHには何回も参加させて頂きましたが、地元の特産物を送り合うまでの関係になり、自分自身のこれから、また農業のこれからについて話し合うことのできる農家の方がたくさんいらっしゃいます。この時期になると、「自分はこの1年でどれだけ成長できたのか」と自分に問いかけるようになりました。私達学生を受け入れて下さっている農家の方々は常に前向きで、私達に何かを教えて下さいます。そんな農家の方々の姿を見て、私達も負けていられない、とさらに食欲にさせて下さるのです。そんな農村WHに、私は今後も関わり続けたいと思っています。



### ■「UNWTO 観光分野における能力開発に関する国際会議」で本学学生グループによる活動が認められました。

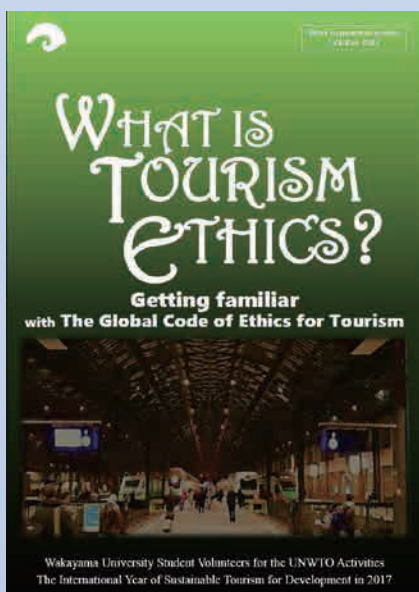


和歌山大学がアフィリエイト・メンバーとして参加する国連世界観光機関 (UNWTO) は、10月8日(日)から10日(水)の3日間、スペイン・マルベリャのレ・ロッシュ (Les Roches) 大学にて「第2回 UNWTO 観光分野における能力開発に関する国際会議 (2nd UNWTO Global Conference on Talent Development in Tourism)」を開催しました。

同会議では、「UNWTO 能力開発に関する学生アイデア・コンペティション」が開催され、本学学生ボランティア・グループが実施している UNWTO が提唱する世界観光倫理憲章 (GCET) を次世代に伝えるためのコンテンツ開発等について、同グループを代表し村田直寛さん (観光学部4年)、椋谷愛音さん (同)、遠藤まりかさん (同) および現在 UNWTO 本部でインターンシップに参加中の嶋川久瑠実さん (同) が、UNWTO 幹部等を審査員とする最終プレゼンテーションに挑み、世界各地からの50以上の応募の中から見事優勝しました。

この後、同グループは UNWTO 本部 (マドリッド) を訪問し、関係者に対して受賞の喜びをお伝えするとともに、UNWTO 主催国際会議に対する運営サポートおよび統計データ集である「UNWTO Tourism Highlights」の日本語版作成協力ならびに GCET の普及促進等学生ボランティア・グループによるこれまでの活動について改めて報告しました。

また、同会議では学生代表による UNWTO 幹部へのインタビューが行われ、遠藤まりかさん(前出)が、UNWTO エグゼクティブ・ディレクターのカルロス・ボゲラー (Mr. Carlos Vogeler) 氏に対して、このほど条約化が決定した GCET の重要性等について、本学学生ボランティア・グループによる普及のための取り組みを踏まえたインタビューを行いました。



上：最終プレゼンテーション

中：学生作成の GCET 普及コンテンツ

下：UNWTO エグゼクティブ・インタビュー

➔ 学生ボランティア・グループの代表者たちのコメント等は  
こちらからご覧ください。

<http://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/news/2017102700033/>

■「ミニ・オープンキャンパス in 東京」 &  
「観光教育研究セミナー 2017 Vol.1 in 東京  
『スポーツツーリズム～メガイイベントが日本社会を変える～』」開催！



上：ミニ・オープンキャンパス in 東京  
「観光学生が語る「地域」と「世界」」

中：観光教育研究セミナー 2017 Vol.1 in 東京  
野川春夫氏による基調講演

下：観光教育研究セミナー 2017 Vol.1 in 東京  
パネルディスカッション

和歌山大学国際観光学研究センターおよび観光学部では、2017年8月10日(木)、フクラシア品川クリスタルスクエア(港南口)3階会議室G(東京都港区)を会場に、「ミニ・オープンキャンパス in 東京」、ならびに「観光教育研究セミナー 2017 Vol.1 in 東京『スポーツツーリズム～メガイイベントが日本社会を変える～』(スポーツ庁、観光庁後援)」を開催しました。

「ミニ・オープンキャンパス」では、佐々木壮太郎教授による観光学部の概要説明に加え、「観光学生が語る「地域」と「世界」と題して国内外で様々な活動を行っている現役学生によるリレートークを行い、学生の目線から見た本学部での学びが紹介されました。

また、今年で第2弾となるセミナーシリーズ『スポーツツーリズム～メガイイベントが日本社会を変える～』では、昨年度の第1回目を海外からの視点でのスポーツツーリズムについての講演としたのに対し、日本からの視点での持続可能なスポーツツーリズムのあり方を考えるということで、野川春夫氏(順天堂大学スポーツ健康科学部特任教授)に「スポーツツーリズム序章—スポーツツーリズムの発展とイベントの役割」と題し、ご登壇いただきました。国内におけるスポーツツーリズム研究の第一人者として野川氏からスポーツツーリズムに関する興味あふれるメッセージが伝えられ、学术界、産業界、関東圏在住の卒業生など各分野から60名を超える出席者一同が熱心に耳を傾けました。基調講演後は、坂井文氏(東京都市大学都市生活学部教授)、太田正隆氏(JTB総合研究所MICE戦略室主席研究員)をパネリストに迎え、野川春夫氏をコメンテーター、本学伊藤央二講師をモデレーターに「スポーツツーリズムの持続的発展に向けての要因とプロモーションを考える」と題したパネルディスカッションを行いました。パネルディスカッションでは、フロアの参加者のみなさまにも質問を通してご参加いただき、スポーツツーリズムの持続的発展、今後の課題、疑問点についての意見を交わしました。

当セミナーシリーズは2020年まで計5回の開催を予定しています。来年度開催予定の第3弾は「スポーツメガイイベントとまちづくり」をテーマに実施予定です。今後もこのような活動を通じて日本のスポーツツーリズムの発展に貢献していきます。

## World Tourism Day 世界観光の日 記念イベント 2017

### パネル展示「サステナブル・ツーリズムの学び

～ PATA 和歌山大学学生支部の研修旅行より～」開催！



2017年9月27日(水)～10月27日(金)、和歌山大学観光学部棟2階多目的スペースで、国連世界観光機関(UNWTO)が定めた「世界観光の日(World Tourism Day・9月27日)」にあわせたパネル展示イベントが開催されました。(共催:PATA 和歌山大学学生支部、和歌山大学観光学部、後援:和歌山大学国際観光学研究センター)

和歌山県田辺市、白浜町で行った研修をもとに PATA 和歌山大学学生支部のメンバーが考えた、“サステナビリティ” “サステナブル・ツーリズム” が披露されました。

➔ <http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2017091200019/>

## Future Events ー今後のイベント紹介ー

### 2017年12月2日(土)

「ミニ・オープンキャンパス in 東京」 &

「観光教育研究セミナー in 東京 2017 Vol.2『これからの観光と DMO』」を開催します！



2017年12月2日(土)、フクラシア品川クリスタルスクエア(港南口)3階会議室G(東京都港区)にて、「ミニ・オープンキャンパス in 東京」、ならびに「観光教育研究セミナー in 東京 2017 Vol.2『これからの観光と DMO』(観光庁後援)」を開催します。

「ミニ・オープンキャンパス」では、国内外で様々な活動を行っている在学生や卒業生によるリレートークを行い、学生の目線から見た本学部での学びを紹介いたします。

また「観光教育研究セミナー」では、近年注目されている DMO (Destination Marketing and/or Management Organization) の歴史的な振り返りとともに、外国人観光客を呼び込む最新の実務などを話題提供し、「これからの観光」「これからの DMO」について、地域づくりの視点も交えて、参加者の皆様と考えていきます。

各イベントの詳細や、参加申込方法などは、下記をご覧ください。

➔ 「ミニ・オープンキャンパス in 東京」

<http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2017101300029/>

➔ 「観光教育研究セミナー in 東京 2017 Vol.2

『これからの観光と DMO』

<http://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/news/2017102600012/>

### 編集・発行

(2017年11月発行)

和歌山大学 観光学部 観光実践教育サポートオフィス

和歌山大学 国際観光学研究センター

〒640-8510

〒640-8510

和歌山市栄谷 930 和歌山大学観光学部棟 2階 K216 室

和歌山市栄谷 930 和歌山大学経済学部南棟 1階

TEL/FAX 073-457-8553

TEL 073-457-7025

E-mail [tourism-er@center.wakayama-u.ac.jp](mailto:tourism-er@center.wakayama-u.ac.jp)

E-mail [info-ctr@center.wakayama-u.ac.jp](mailto:info-ctr@center.wakayama-u.ac.jp)

URL <http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/>

URL <http://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/>